41

口常磐津文字菊（宝暦八―享和元）

二代目文字太夫の妻にて菊と云う。作曲の名人にして「花の樂」によれば「お妻八郎兵衛」（よしか入お半）「子持ちの月」等は彼の女の作なりと

享和元年死

42

口二代目常磐津若太夫（―一八二九）

初代の弟子なるべけれど芸歴明らかならず。その芸居に出勤せるは寛政九年正月都座に政太夫のナガシを始め同年三月にも政太夫のナガシを語りし以来絶えて芸居出勤なかりしより察するに初代の如き名人ならざりしか如

落語家奇妙都数に船遊亭船橋奥平の臣、兼太夫門弟若太夫と云う後麻布十番に住、下谷吹ぬき奇を開く、音曲咄の元祖、文政十二年四月十三日歿とあれば、この人なるべし。広警廟橋住

43

回三代目常磐津若太夫（―天保十）始め喜久太夫、和歌太夫

二世九蔵の後の三世武佐の弟子寛政十二年名をとる

始め喜久太夫と称し享和元年頃より番附に見えるが後享和二年九月市村座に和歌太夫と改め始めて初代綱太夫（三代目兼太夫）のナガシを勤めし以来喜代太夫、伊勢太夫のナガシを勤めしが享和二年から文化十四年まで番附に名なし。これは三年師の九蔵武佐破門のためなり。文化十四年十一月森田座に三代目小文字太夫出勤なくタテを勤め（当時の稽は三代目綱太夫（四世兼太夫）造木太夫（三世造酒太夫）の下にありしものの如し）文政三年二月河原崎座に始めて太夫場となりて「新お七」を語りし以後は三世小文字太夫のワキとして数回出勤、天保三年五月三代目若太夫と改め引つき芸居に出勤し

おちゝしが天保十年九月中村座出勤を最後として十二月六日死歿す。享年不詳、麻布長坂大長寺に葬る。正門院法善日縁信士（歿年月は五代目和歌太夫調）

定紋の菊菱に因んで此の門弟一派は菊菱派と称して後に同じく常磐津にありても使きなる語りとなる

二代目常磐津喜代太夫（安永七―　）

常磐津文字梅の弟子にして寛政五年（十六才）喜代太夫の名を取る。寛政十年九月森田座に始めて控に出で同十一月同座にて三代目兼太夫のかしを語る。三代目文字太夫歿後、須賀綱太夫と兄弟の盟約をなし綱太夫のかしかつきを語りしが享和三年市村座の「関の扉」に始めて太夫場を語る。その後綱太夫後の三代目兼太夫、三代目小文字太夫のかしつきを勤め文化十三年八月河原崎座出勤後その名なければそう歿死とす。三代目佐々木幸八の実子なり

常磐津都賀太夫　　始め三岳音太夫

始め音太夫と称し文化四年五月中村座に始めて綱太夫（三代目兼太夫）のかしを語り文化八年都賀太夫と改名し、六月市村座に三代目兼太夫のかしを語る。その後も同人に添え同三回出勤せり。同十一年その歿するに及び九月中村座には小文字太夫のかしを勤め文政五年五月市村座にはそのつき語りとなる。その後文政六年三月森田座に出勤以後至佐出演なし、文政三年十一月玉川座に小文字太夫出勤なく始めて太夫場を語れり

NO.
DATE

46 口常磐津 重太夫
寛政七年十一月河原崎座に二代目兼太夫のナガレ
（此の人は八重太夫と同人かな、）

47 口常磐津八重太夫
寛政九年正月都座に二代目兼太夫のナガレ 寛政十一年三月森田座にて要太夫のナガレ

48 口常磐津仲太夫
寛政九年正月河原崎座に二代目兼太夫のナガレを語る。同年六月
桐座の伊勢太夫のナガレを語りし外番附に見えず

49 口常磐津志津太夫
寛政十年六月中村座二代目兼太夫のワキ

50 口常磐津加賀太夫 後、吾妻加賀太夫
寛政十年六月中村座二代目兼太夫のナガレ、後同人に従い吾妻を
名のり、享和二年二月河原崎座にナガレ

51 ◉常磐津 要太夫

芸歴不詳、寛政十一年三月森田座にクテを語る

「常磐津には「政太夫改め」とあるきれど此の政太夫は甲府巡業中十月客死せる人なれば一時的改名か？

52 ◉常磐津春太夫

寛政十一年三月森田座 要太夫のワキ

これも「常」には「綱太夫改名」とあれど綱太夫は後に三世兼太夫となりし人なれば これも一時的改名ならん

53 ◉常磐津三輪太夫

享和三年十一月中村座に伊勢太夫の十かしを勤めし米国人 従之数回出演、文化四年後の番附にその名なし

54 ◉常磐津富士太夫

享和三年十一月河原崎座に綱太夫（三世兼太夫）の十かしを組太夫と一日替りに勤む

55 ◉常磐津久太夫

文化五年二月森田座に伊勢太夫の十かし

◉ 四代目常磐津兼太夫　始め三代目綱太夫、二代目綱太夫、後三代目松寿斎

三代目兼太夫の門弟にて、享和初年より控となり二代目綱太夫を名乗る　享和三年十一月河原崎座に綱太夫（後三代目兼太夫）のナカレに富士太夫と一日替りにて初舞台後、綱太夫、三代目富太夫となるや同八年二代目綱太夫を継ぎて六月中村座に三代目兼太夫のナカレを譲り、文化九年九月中村座に小文字太夫のナカレとなる、其の後も兼太夫のワキ小文字太夫のナカレとなり出勤、三代目兼太夫歿するに及び文化十一年九月中村座より小文字太夫（三五郎元）のワキに出世、文政三年七月小文字三代目文字太夫を相続するや四代目兼太夫となりワキと勤め文政三年三月河原崎座に始めて太夫場となり同座渡り後、松本幸四郎、岩井半四郎と京坂に上る、江戸に帰り後文政五年十二月森田座より小文字太夫（後四五郎元）のワキを勤めおり（その後は三代目造酒太夫より少し下なるべし）文政十二年改三代目松寿斎と改名芝居出勤せしが天保元年水谷は芝居に出勤せざりき、「常磐津」に此の斎名は元祖太夫隠居名を四代目兼太夫に譲りし旨記入あり。

又常に文化十一年十二月中村座に太夫場となり　とあり

又、文化十二年「吉原細見」に綱太夫の名あり

◉ 三代目常磐津安和太夫

文化八年八月森田座に三代目兼太夫のナカレ、後にも十年十一月中村座に兼太夫に後いナカレに出演、後文政二年十二月河原崎座には三代目文字太夫のナカレに出勤す、吉原に住む